事例５

「バイク無免許運転」が予測される高校１年生への予防的な指導援助

～相互支持的で互いに励み合う学級づくりを通して～

（指導援助者は学級担任，29歳，男性，国語担当）

１　予測される問題行動　　バイク無免許運転

２　対　象　　高等学校１年生　男子（Ｍ男）

３　問題行動を予測するまでの経過

学年の取り組み

Ａ高校は，Ａ市は郊外にある実業高校である。生徒の学習意欲は必ずしも高くなく，問題行動も多い。大半の生徒は就職希望であり，一部の生徒のみが進学する。

学年会で，学年担当者間の目標の一つとして，「生徒理解の上に立つ指導」を掲げたのも，こうした実態を踏まえてのことだった。

担任は，特に「予防的な指導援助」のあり方を自分自身の課題と意識して指導にあたることにした。どうしても，問題が起きてから指導することが多く，これまで未然に防ぐことができなかった反省からである。

４月，入学式の直後から，「指導要録」「家庭環境調査票」等を念入りに点検し，生徒理解を図った。

４月末，ＹＧ性格検査を実施したが，担任は，一つのサンプルとして，自分のクラスである１年Ｄ組の因子分析をしてみた。Ａ高生の意識の一端がそこに表れているように思われたからである。

分析してみると，抑うつ感，劣等感などが非常に高い。また，系統別の判定では，不安定で，消極的な傾向が表れている。これらは，今後の学級づくりに際して，参考になるものと考えられた。

学年の指導体制として，定期的な個別面接，必要に応じての家庭訪問，校舎内外のチャンス相談をかねた巡回指導を強化することにした。補導的な意味の巡回ではなく，生徒との「ふれあい」と理解のための巡回指導である。

また，５月に「中学校訪問」を実施し，10月には，教科担当者・生徒指導部と，学年担当者による「学年懇談会」を持つなど，多角的な生徒理解を図ろうと考えた。毎週，担任が持ちまわりで発行する「学年だより」などを通して，担任と生徒の理解を一層すすめたいと考えた。

気になる生徒

４月当初から，生徒の遅刻・欠席について特に重点的な指導をしたこともあり，５月まで，クラス内の遅刻・欠席・早退ゼロの状態が続いた。３年次の就職試験との関連から自覚を促したことと，学年の朝の登校指導が効果的だったように思われた。しかし，その一方学校生活への慣れから，生徒たちも少しづつ問題を現わし始めてきていた。

Ｍ男も，そんな気になる生徒の一人だった。

Ｍ男は，Ａ市に隣接するＢ町から通っている生徒で，最初テニス部に入ったが，５月の連休明けに「両親がやめろと言うから。」と，退部していた。

その直後の放課後，Ｍ男は，一人教室にぽつんとすわっていた。通りかかった担任が声をかけたが，表情は暗く，かたくなな態度だった。

ＹＧ性格検査で見ると，標準的なＡ型であったが，抑うつ感，劣等感が非常に高かった。

５月末の「中学校訪問」で，Ｍ男の出身中学校を訪問したが，Ｍ男は特に目立つ存在ではなかった。その直後，「１学年ＰＴＡ総会」の折り，Ｍ男の母親と会ったが，「バイクに乗りたがって困る。」という言葉が，気になった。

６月初め，中間考査明けの定期面接で，Ｍ男は「学校は，つまらない。自分は，ダメな人間で，両親の言うとおり，見込みがない。」と言う。中間考査の成績は，クラス47人中40番だったが，担任の担当教科である国語に関しては，上位にある。そう言って励ましたが，表情は変らなかった。

将来の希望をきくと，中学時代からの親友と一